

# 令和5年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

## 作業療法士部門

三船 義博 涌波 淳子

「精神科作業療法士に問う」をテーマに日本精神科医学会学術教育研修会作業療法士部門が、令和5年11月30日から2日間の日程でオークラホテル丸亀にて147名の受講者を迎えて開催された。

秋晴れの爽やかな天気のもと、久しぶりの現地開催で、参加する側も迎える側も期待と緊張感の入り混じった面持ちで受け付けが開始された。会場からは青い海の上に白い瀬戸大橋がくっきりと映えており、写真を撮る方々もいて現地開催ならではの光景が見られた。

開会式では、日精協香川県支部長の西紋孝一先生の開講の挨拶、山崎學日本精神科医学会会長の挨拶、そして池田豊人香川県知事の挨拶が行われ、どの方からも対面で開催されたことの喜びが話された。

続いて、山崎學會長による会長講演「精神科医療の将来展望」が行われた。会長講演では、文政元（1818）年の漢方医による私立の精神科診療所から始まった200年にもわたる日本の精神科医療の精神障害者に対する人権問題と治療、そして医療福祉政策の歴史が現在にも影響を与えていることが話され、その後、種々のデータをもとに、現在の精神科医療の課題と方向性について説明があった。精神科における入院患者数は年々減り続け、平均在院日数も減少していく一方、外来患者数は急激に増加、特に認知症やうつ病患者が増加していること、少子高齢化により働く人が減り、医療機関でも非正規雇用が増えていること、子どもの同居率は50年前の半分である36%となっていることから、精神障害者を地域の中でどのように支えていくのが課題であると述べられた。また、それらを解決するためには医療や介護等にかかる社会保障費の増額が必要であるが、財務省は一部



のデータのみを示し国民に不安を与えるだけであるので、私たちはしっかりと真の情報を見極めないといけないと締めくくられた。

基調講演は、東北文化学園大学医療福祉学部作業療法学専攻・香山明美教授により「精神科作業療法の実践と課題～一人ひとりの実践が未来につながる～」と題して講演が行われた。先生ご自身が作業療法士（OT）として成長していく原体験として、「退院したい」といった一人の患者さんとの出会いから、「良い治療者になる」ためには、丁寧に患者さんの声に耳を傾け、事例検討を行うこと、スーパーバイズを受けることが大切であったことが語られた。そして、「一人では何もできない」という思いから、病棟におけるチーム医療の確立、日本作業療法士協会における活動に広がっていったという自己紹介を軸に、作業療法士としてこれから考えなければいけないこと、自分自身を成長させるために大切なことが教育的視点と同志としての視点の両方から語られた。

作業療法の治療・援助は、基本的な動作能力から社会の中に適応する能力まで三段階の能力を維持、改善し、「その人らしい」生活の獲得であり、日本作業療法士協会の作業療法の定義は、「作業療法は人々の健康と幸福を促進するために医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である」と述べられ、これからのOTの視点は、地域生活支援が基盤となり、入院医療も地域生活支援の一部であると語られた。たとえ慢性期病棟のOTであってもその対象者の声にしっかりと耳を傾け、

その力を信じ、その生活課題にどれだけ迫れるかを考え続けることが大切と述べ、OTは、「生(活)きることを支援する」職種であり、OT自身が普通の人として自分の生活を充実させることは対象者支援にも生かされること、そして、淡々として真摯な作業療法の実践が自らの未来を切り開くことになると会場参加者の皆さんに力強いエールを送ってくださった。

パネルディスカッションではテーマ「精神科作業療法士に問う」と題して、3名のファシリテーター(医療法人社団うら梅の郷会朝倉記念病院理事長 林道彦先生、前出の香山明美先生、医療法人社団中和会西紋病院社会復帰事業部係長 吉川敦先生)のもと、6名のパネリスト(医療法人崇徳会田宮病院こころのリハビリセンター技師長 菊入恵一先生、医療法人社団以和貴会いわき病院作業療法課長 小松博彦先生、医療法人社団精華園海辺の杜ホスピタル 佐野秀平先生、特定医療法人富尾会桜が丘病院作業療法室室長 田尻威雅先生、一般社団法人八幡浜医師会立双岩病院作業療法課係長 松本覚先生、医療法人清流会そよかぜ病院 柳澤明寛先生)によって行われた。林先生は、作業療法の歴史、チーム医療・多職種連携の重要性、精神病圏(急性期、慢性期)と認知症の作業療法、外来作業療法とリワーク等について詳しく説明された。また、作業療法はリハビリテーションとして確立し、病院経営に寄与していることにも触れられた。そして事前に行われたアンケート①【作業療法評価・計画書について】②【作業療法活動について】③【多職種連携および作業療法部門連携について】④【作業療法における算定について】⑤【今後の精神科作業療法について】をもとに、意見が交わされた。①に関しては、「作業療法評価・計画書は必要であるが、煩雑さがあり、実用化が難しい」「患者が何のためにするのか知っている必要がある」等の意見が挙げられた。②に関しては、「2時間を標準とするプログラムを実施する中、自由度が低い」「高齢者に必要な身体リハ等、対象者に応じた個別対応ができない」等の意見が挙げられた。③に関して、

アンケートでは大半は多職種連携ができているとの回答であったが、「OTは必要とされていないのでは」「OTの中で完結している」等の意見もあった。④に関して、「算定を考えると集団作業療法が優先され、個別作業療法が思うようにできない」「算定されない部分は病院側にOTの努力が見えない」等の意見が挙げられた。⑤に関して、「今後病床が減少し、急性期患者と外来での作業療法が中心になる」「研鑽していくことが重要である」等の意見が挙げられた。吉川先生は普段の葛藤を本音で話してくださいと述べられ、香山先生の巧みな司会のもと、3時間にわたり、受講生も巻き込みながら活発な意見が交わされ、大盛況のパネルディスカッションとなった。1日目の日程が終了し、懇親会が開催された。全国から集まった受講生同士が親交を深め、サマナイトという天然鉱石の楽器による演奏や香川県クイズ検定等を楽しみ、大いに盛り上がった。

第2日目の特別講演は「精神科作業療法のこれから」と題して石川県立こころの病院認知症疾患医療センター副所長の村井千賀先生が講演された。「精神症状の悪化予防の視点からライフステージごとの課題を把握し、ストレスへの対応に取り組むことが求められる」「当事者が望む生活を実現するための精神科作業療法としてICF(国際生活機能分類)を活用した総合的なアセスメントを行い、残存した機能を活用することが重要である」「就労支援施設やハローワークとの連携が必要とされる」などと話された。

閉会式では、日本精神科医学会から受講証書が授与され、続いて香川県支部への感謝状の贈呈が行われた。同医学会構成員からの挨拶の後、日精協香川県支部代議員である佐藤仁先生による閉会の挨拶が行われ、2日間の全日程を無事終了した。講師としてご尽力いただいた先生方、そして本研修会の企画・運営に当たられた香川県支部の皆様

(日本精神科医学会  
学術教育推進制度学術研修分科会)